

修士論文概要

中国人日本語学習者におけるコソアの誤用と協働的活動による習得の可能性

LONG ZANYU (博士前期課程 2023 年 3 月修了)

本研究は、日本語と中国語の指示詞に着目し、中国人日本語学習者の誤用と習得について探ったものである。日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の三項対立であり、中国語は近称「這」と遠称「那」の二項対立の指示詞体系である。先行研究では、中国人日本語学習者が母語の影響を受け、中国語指示詞の近称「這」と日本語指示詞の近称「コ」を対照し、「コ系」の過剰使用が観察されている(高 2002a、b、趙 2018)。また、非現場指示詞の習得において、中国人日本語学習者は学習期間が長くなっても「コ系」の誤用が観察されたことが明らかにされている(迫田 1996、安 2002)。中国の日本語教育の現場では、非現場指示用法の指導は必要と考えられているもの、実際の指導は行われていないことが予備調査からわかった。

そこで、本研究では、中国国内の日本語学習者を対象として、非現場指示用法の指導における習得困難点とピア・ラーニングが与える影響を明らかにすることを目的とした。ピア・ラーニングに着目したのは、当該指示詞が指導されていない中で、学習者同士で学びあうことができるかを探りたいと考えたからである。目的を明らかにするために、以下の研究課題を設けた。

- (1) 中国国内の日本語学習者にとって非現場指示用法の習得困難点は何か。
- (2) 中国国内の日本語学習者にとってピア・ラーニングが非現場指示の習得にどんな影響を与えるか。

中国の A 大学日本語学科の 3、4 年生、計 12 名を無作為に 4 つのグループに分け、グループごとにオンラインによる調査を行い、事前事後テスト、練習問題の用紙、ピア・ラーニングの録音を主なデータとした。

課題 (1) については、本調査の学習者は全体的に「ア系」のほうが「ソ系」より習得が進んでいたが、「想起」機能の「ア系」は難しいことが明らかになった。さらに、学習者が日本語の指示詞を選択する際、中国語と日本語を対照しながら、指示詞を選択する傾向が見られた。中国語の指示詞は二項対立であるため、「コ系」の過剰選択、遠称において「ソ系」と「ア系」の混用、近称において「コ系」と「ソ系」の混用がよく見られた。現場指示用法の影響を受け、非現場指示詞を選ぶ際、学習者は「現実的な距離」を基準に判断している傾向が示された。

課題 (2) については、グループごとにピア・ラーニングの異なる効果が示された。効果があったグループは、「ヒントカード」をうまく利用し、互いに学び合うやりとりが観察され、ピア・ラーニングが積極的な影響を与えることが分かった。一方、効果があったとは言えないグループでは、中国語の転用(対照と「距離」)が見られ、グループの議論が的外れな方向に進んでしまうことが観察された。グループメンバーの知識が不足している際は、全員のが考えが偏り、誤答につながるということがわかった。

今回は 12 名の学習者を対象として調査したため、少人数の調査結果を一般化することはできないが、ピア・ラーニングの実践は可能であることがわかった。ピア・ラーニングを行う際、学習者同士で解決されなかった点については、教師の明示的な指導が必要であることが示唆された。